

埼玉育ちのグローバル人

Hakuna matata! ケニア子育て体験記

第3回 「プサマカシ!

次男はケニア産まれ」



今村 玲子さん

「ケニアで出産した」と話すと皆さん一様に驚かれます。ちょうど帰国して間もない 1991 年 2 月にカネボウヒューマンズスペシャルというテレビ番組で「プサマカシ 若き助産師の アフリカ熱中記」が放送されアフリカの出産事情が話題になっていました。「プサマカシ」とはリンガラ語で「強くいきみなさい」の意味。アフリカでの出産について訊ねられると私は「藁の上で、プサマカシと言われながらね・・・」と話をし始め皆さんを一瞬驚かすという楽しさを覚えました(笑) 実際は、ナイロビの中心地にあるナイロビホスピタルという総合病院で出産しました。N 検診、分娩は同院にオフィスを持つインド人の男性医師にお世話になりました。



1988 年 5 月 20 日
二男 翔が産まれ、母はお兄ちゃんに

現在は日本でも夫が検診に付き添ったり出産に立ち会ったりするのは普通のことになりましたが、海外では当時からそれは当たり前のことで待合室

に妊婦一人でいるのは日本人の私くらいでした。

さて出産当日の朝、夫と一緒に病院に行きましたが、夫は仕事が休めないとのことで私を送り届けるとすぐに職場に向かいました。病室にきた看護婦さんは気の毒そうな表情で私を見つめ「Your husband has gone!」と！立ち合い出産が当然の文化ですので、入院中私は 可哀想な奥さんになってしまいました(笑) 病院の都合で予定日より 5 日早く促進剤を使っただけの計画出産でした。長男の時も予定日を過ぎたのでやはり促進剤を使ったので心配していなかったのですが、外国の薬は強いのかとてもきつい出産になりました。

何かあった時にと、分娩に関係する言葉を書き集めた手帳をもって臨みましたが、結局耳にした言葉は「push! push!」つまり「プサマカシ!」。結局用意した手帳は役に立ちませんでした。新生児室に並んだ赤ちゃん達は肌の色も髪の色も違い、また割礼をした赤ちゃんとは様々でした。

息子の黄疸が気になり先生に相談すると「日本人の肌はもともと黄色いだろう!」と相手にされず困ったことも。日本国内の様に予防接種の通知も来ません。同年代の子ども達と同じになるように接種時期に注意して日本大使館の医務官にワクチン接種をお願いし、手作りした母子手帳に記録しました。熱を出したり、下痢をしたり子どもならよくあることでも、アフリカでは不安は増えますし、薬を飲ませるにも英語で書かれた処方箋に読

み間違いがないか気を使います。ただでさえ子育ては何人目の子であっても初めての連続。実家を頼ったり、公園で先輩お母さんに話を聞いてもらったり、そんな普通のことができない中での子育てはいつも心細さと隣り合わせでした。二人とも大きな病気やけがをせずに成長してくれたのは当たり前のことではなく、とても幸運なことだったと思います。



ワングリーさんにはたくさん
遊んでもらいました。

さて、ケニアの話から離れますが、帰国翌年に3人目の子が生まれ、さらにその5年後、私はスキルス胃癌を患いました。胃癌の中でも厄介なタイプの癌で5年生存率は一桁でした。当時、子ども達は11歳、8歳、5歳。入院中の子どもたちの生活をどうしようか、入院前に準備しておくことで頭がいっぱいで自分の病気を心配する余裕はありませんでした。実家の母は体調を崩しているし、夫の母は高齢でどちらも頼れません。途方に暮れる中、ご近所さんや、ママ友たちが総出で「子どもたちの面倒は任せて、しっかり治してきて！」と励ましてくれました。

一番下の娘はまだ幼稚園児。朝はバスが来るまで、夕方は夫が帰るまで預かってくれました。遠足の日には別のママ友がお弁当を作ってくれました。近所の方々が毎日交代で夕飯のおかずを届けながら子ども達の様子をみてくれました。退院後、「お母さんがいない間、夕飯豪華だったよ!」「恵(娘)ちゃん、毎日可愛い髪型だった!」などなど、母としては素直に喜べない感想も聞かされましたが・・・周りの皆さんには本当に助けていただきま

した。これが、頼れる親族や親しい友人と遠く離れた、しかも言葉も通じない海外だったらどうなっていたでしょう!!

現在私は、地元岩槻で「いわつき国際交流会日本語プラザ」というボランティア団体に所属し、地域で暮らす外国人の日本語学習のお手伝いをしています。夜の教室に来られない外国人ママさんのために昼間の教室を始めたい!という会の代表のお誘いがきっかけです。異国で出産や育児をする大変さを経験した自分なら何か役に立てるのではないかと!役に立たなくても彼女たちの気持ちを理解して頷くことくらいはできるのではないかと!との思いで活動しています。また、病気をした時にお世話になった方々に直接ご恩返しをすることはできませんが、今助けを必要としている人たちのお手伝いすることでご恩返しができればと思っています。



親子クラブ (2016年3月撮影)

持ち寄りの昼食会はさながら多国籍料理のバイキング!

この会の名前は「親子クラブ」。日本語の勉強だけでなく、子どもを遊ばせながらおしゃべりして、異国での妊娠、出産、子育ての不安を共有しています。活動を見た日本人の若いママさん達はいって来てくれて、外国人ママが勉強中の保育や子育てについておしゃべりと、私達の年代ではできないことをしてくれています。さらにママ友として日常的に交流しているのはとても嬉しいことです。勉強が終わると、お昼ご飯を一緒に食べながらま

たおしゃべりと、とても和やかな会です。残念ながらコロナ禍は集まれなくなりましたが、Zoom ミーティングという形で続いています。



コロナ禍、週に一度 Zoom を使っておしゃべり。
また、みんなで集まれる日が待ち遠しいです。

対面ではありませんが、マスクを外した顔を見ながらおしゃべりできます。感染対策が緩和され、皆さんがこれを読まれている頃には、また対面での活動ができているかもしれませんね。

私たちの活動の様子をさいたま市市民活動サポートセンターの HP 内で紹介していますので是非ご覧ください。これからも、「近所のおばさん」として身近な外国の人たちと交流していけたらと思っています。

これで私のリレーエッセイは終わります。最後までお読みくださりありがとうございました。